

はじめての歎異抄講座

1.七仏通誠偈

「諸悪莫作 衆善奉行 自浄其意 是諸仏教」(『出曜経』、天台大師智顛『摩訶止観』)

(もろもろの悪は作すこと莫れ もろもろの善は奉で行え 自らその意を浄くする
これ諸仏の教えなり)

仏教とは戒律を守り、貪欲(我欲)、瞋恚(いかり)、愚痴(真実を知らない愚かさ)、驕慢(たかあがり)、疑心(仏教の真理性を疑う)、悪見(誤った見解、思想)を改め、何ものにもとらわれない無執着の清らかな生活をする。さらに心を静める禅定(精神統一)を習得し、真実をさとる智慧を開発する、これらを称して戒、定、慧の三学が仏道とされる。

大乘戒…不殺、不盗、不淫、不妄語、不酤酒(酒を売らない)、不説四衆過罪(教団構成員の罪過を言わない)、不自讃毀他(自分をほめ、他人をそしらない)、不慳(ものおしみをしない)、不瞋(怒らない)、不謗三宝(仏法僧の三宝をそしらない)の十重戒と四十八輕戒(『梵網経(梵網経盧舎那仏説菩薩心地戒品第十)』)

→(1)大乘戒は数が少ない(小乗律は250あまり)、(2)「具体的な行動規則」の小乗戒に対し、大乘戒は「こころがけを説く」。一長一短あり。

→生前の功績をたたえ、浄土へ迎えとる来迎を中心とした阿弥陀信仰は平安時代中期に盛んになり、『観無量寿経』に描かれた九品往生(上品、中品、下品)の世界観が庶民に浸透するにつれ、次第に論功行賞的な浄土救済観が際立っていった。

2.願

願…大乘仏教の「願」は一切衆生の成仏を目指す願いをさす。総願と別願がある。総願とはすべての仏菩薩に共通する願で、四弘誓願「衆生無辺誓願度 煩惱無尽誓願断 法門無量誓願学 仏道無上誓願成」。別願とは仏菩薩がそれぞれ独自の立場から立てた特別の願「阿弥陀如来の四十八願」「薬師如来の十二願」など。cf.悲願、本願力(本願のはたらき)、願生(往生を願う)(岩波仏教辞典より)

阿弥陀如来の四十八願の一つは、衆生を摂受するために欠くことのできない願で、大別すると三種ある。

(1)一切衆生を救済するために、如来はまず凡夫が認識することのできるような仏身すなわち方便法身の形を示現しようという本願(摂法身の願)

(2)一切衆生はたとえ信心を獲得するも、成仏したのではない。それ故、彼らをして無上涅槃をさとらしめるための場所として、莊嚴功德の浄土を建立しようという本願(摂浄土の願)

(3)一切衆生をして無量光明土に往生せしめようという本願(摂衆生の願)

3.本願

久遠実成の阿弥陀如来が一切衆生を救済するため、凡夫が認識できるよう法蔵菩薩と成り、四十八の願いを超発された、それを本願といい、なかでも第十八願を王本願、根本の願とする。

「設我得仏 十方衆生 至心信樂 欲生我国 乃至十念 若不生者 不取正覚 唯除五逆 誹謗正法」

「たとひわれ仏を得たらんに、十方の衆生、至心信樂してわが国に生ぜん^{おも}と欲ひて、乃至十念せん。もし生ぜずは、正覚^{しょうがく}を取らじ。ただ五逆^{ごぎやく}と誹謗正法^{ひぼうしょうぼう}とをば除く」(『仏説無量寿経』正宗分)

経で説かれた本願と、それを受けて「本願をどう受け止めるか」がしきりに議論された→お味わい

「彼仏因中立弘誓 聞名念我總迎來 不簡貧窮將富貴 不簡下智与高才 不簡多聞持淨戒 不簡破戒罪根深 但使回心多念仏 能令瓦礫變成金」(法照禪師『五会法事讚』)

「彼の法蔵比丘は願を立つ。名を聞き、我を念ずれば、すべて迎え来たらしむ。貧しき人も富人も、浅智も有識者も、多聞も持戒者も、破戒者も罪人も、へだてなし。ただ、回心し、ひたすらみ名を称すれば、石を黄金^{こがね}に変ぜしむ」

→法蔵菩薩つまり阿弥陀如来の願は誰に向けて立てられたものかを考えるとき、「不簡」つまり「えらばない」ものである。善根の少ない悪人も救われるとすることから悪人正機といわれるが、悪人正因とも。

4.願行具足

行…大乘仏教の「行」は菩薩行をさし、実践を意味するほか、「業」(karman)と同義に用いられたり、「諸行無常」のように「形成されたもの」の意でも用いられる。cf.修行、行儀

具足…「具」は備わる、「足」は足るという類義語を重ねた熟語で、物事が十分に備わるの意を踏まえて、仏教語としては「完全な」の意の形容語として用いられたり、「完全に」の意の副詞として使われることもある。(岩波仏教辞典より)

「言南無者 即是歸命 亦是發願迴向之義 言阿弥陀仏者 即是其行 以斯義故 必得往生」

「南無といふは、すなはちこれ歸命なり、またこれ發願^{ほつがん}回向の義なり。阿弥陀仏といふは、すなはちこれその行なり。この義をもつてのゆゑにかならず往生を得」(善導大師『觀經疏』、読み下しは親鸞聖人『教行信証』行文類)

(「南無」というのは、すなわちこれ歸命であり、またこれには發願回向の意味もある。「阿弥陀仏」というのは、すなわちその行である。こういうわけがあるから、かならず往生することができる)

善導大師→南無阿弥陀仏の六字のうち、「南無」の二字が願、「阿弥陀仏」の四字が行をあらわ

し、南無阿弥陀仏の六字に願も行も備わっているとする。

「爾者南無之言帰命…是以帰命者本願招喚之勅命也 言発願回向者 如来已発願回施衆生行之心也 言即是其行者 即選択本願是也 言必得往生者 彰獲至不退位也」

「しかれば南無の言は帰命なり。…ここをもって「**帰命**」は本願招喚しょうかん ちやくめいの勅命なり。「**発願回向**」といふは、如来すでに発願して衆生の行を回施したまふの心なり。「**即是其行**」といふは、すなわち選択本願これなり。必得往生といふは、不退の位に至ることを獲ることを彰すなり」(親鸞聖人『教行信証』行文類)

(そこで「南無」の言葉は帰命と訳される。…こういうわけで「帰命」とは、如来が信ぜよと我を招き喚びたもう仰せである。「発願回向」というのは、如来が因位いんにのときに誓願をおこされて、今日われらの往生の行を与えてくださる大悲心である。「即是其行」というのは、如来の与えたもう功德すなわち名号であって、本願の行者の上に相続の称名となってあらわれているものである。「必得往生」とは、この世で不退の位に至ることをあらわすものである)

親鸞聖人→阿弥陀如来の名号である南無阿弥陀仏、六字全体に、衆生を浄土に往生せしめるはたらき(願と行)がすべて具わっているとする。

念仏は阿弥陀如来に「向けて」称えるものであり、出家しなければ本当の念仏は叶わないのだという特権者意識が流布していたなか、それを根底から変える流れが法然聖人から始まる鎌倉新仏教のひとつの特徴だった。念仏を「わがものとするのではない」、私自身に阿弥陀如来がはたらきかけてくださるものだとするこの教えの流れを、念仏と区別して、本願念仏と呼ぶようになる。この本願念仏の教えが鎌倉新仏教の中心的な役割を果たして、信仰を中心にすえ、出家主義を否定した、民衆による宗教改革の大きなうねりにつながっていく。